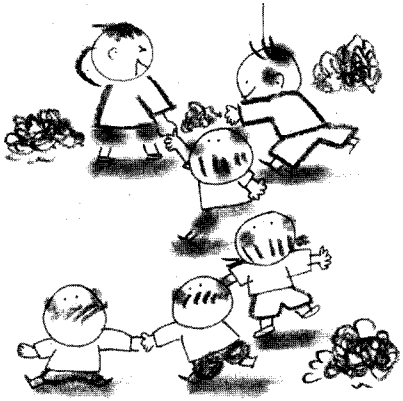
子ども文化の詩学（3）

遊びの暗がり

―伝承遊びに潜む力―

森下みさ子



◆今もなお伝承される遊び

「だるまさんがころんだ……」。マンション敷地内のキッズ広場から今日も元気な声が響く。遊び方を見ていると、私が子どもだった数十年前とほとんど変わらない。「『だるまさんがころんだ』するもの、よっといで」と指を高く掲げた女の子の周りに、顔見知りであろうマンションに住む子どもたちが駆け寄る。お姉ちゃんやお兄ちゃんにくっついてきた小さな子から、小学校低学年ぐらいの子まで、わらわらと集まる様子はひと昔前の原っぱのようだ。掲げた指にちゃんと届く子まで

が正式メンバーで、届かない小さい子たちが「みそっかす」（「おみそ」とか「おまめ」という言い方もある）なのも昔通りである。小さい子はジャンケンの輪に加わってはいても、タイミングよく拳を出せないまま、大きい子たちの中から鬼が決まる。その後も大きい子にはやや厳しく、小さい子にはやや甘く、鬼が振り向くたびに動いたか動いていないかの判断が下されて、やがて鬼の手には鎖のように子どもたちがつながれていく。そして、じりじりと鬼に近づいていた子の「切った」のかけ声と同時に鬼につながれていた鎖が切られると、それこそクモの子を散らすように、パラパラと駆けて鬼から離れる。と、鬼の「止まれ！」の声。

そこから先、私の子ども時代とは少し違う遊び方を知った。「何歩？」と聞く鬼に対して、子どもたちは大きな声で「カミナリで五歩！」と答えたのだ。「カミナリ？」と首をかしげながら見ていると、鬼はジグザグと稲光のような軌跡を描いて、逃げた子たちの方に近づいていった。なるほど、原っぱのようには広くないキッズ広場ならではの工夫なのだろう。歩数を減らすのではなく、鬼がカミナリになって稲光のようにジグザグと進むことで、結果的に逃げた子たちとの距離を調整していたのである。

それにしても、いわゆる伝承遊びが、マンションのキッズ広場という極めて現代的な場所で、昔ながらに遊ばれていることに驚かされる。「この指とまれ」に続く「指切った」が、その昔遊女と真男の間で交わされた指切りの約束に根をもつことなど、子どもたちは知る由もないだろう。にもかかわらず、「指切った」仲間同士は同じ遊びのルールにのっとって遊ぶという合意の仕方は、歯切れの良いリズムと共に今日まで伝わっている。

そもそも「だるまさんがころんだ」という意味不明の縁起でもないような数え言葉が、何をもって小さな身体を介して、延々と伝えられてきたのだろう。しかも、そこに「カミナリの五歩」という工夫が加えられ、伝承遊びは見事にマンションの狭いキッズ広場に息を吹き返している。子どもの身体という、まだこの世に現れて間もない、小さくてよく弾む容器をもって、はるか昔の身体の記憶と新しい工夫が盛り込まれているのである。幼い者たちが、好んで選び取って伝えてきた遊びには、いったい何が潜んでいるのだろうか。

◆伝承遊びの深みへ

幼いころ誰もが遊んだであろう「かくれんぼ」を取り上げて、藤田省三氏はそこに、精神が形づくられるときの「経験の胎盤」が用意されているという。藤田氏によれば、かくれんぼの鬼が目を開けたときに感じるのは、「人っ子一人いない空白の拡がりの中に突然一人ぼっちの自分が放り出されたよう」[1]な感覚であり、それは実は、社会から外されたときに感じる「孤独」の体験に等しい。大げさに聞こえるかもしれないが、その非社会的な呼び名からして「鬼」が引き受けるべき「孤独」であることは間違いないだろう。しかし、藤田氏はその一方で、隠れている側に訪れる「孤独」の体験にも目を向ける。思い出してみると確かに、見つからないように身を潜めて隠れているときもまた一人ぼっちであった。そして、その「孤独」に耐えられなくなるころ、心ひそかに鬼が見つけてくれることを願った。ということはすなわち、鬼も隠れる側も共に一時的に「社会からの隔離」に遭ったような孤独を体験し、互いに見つけたり見つけられたりすることで「社会に復帰」するという救いを得ているのだ。かくれんぼ

では、そのように鬼も隠れる側も「社会喪失の危機」を体験し、共に自分を救いながら相手をも救う「相互性の世界」を体験しているといえる。

しかも、この鬼と隠れる側とは、入れ替わることによって両方の立場を体験する、その繰り返しこそが遊びを活気づけているのだ。社会からの隔離・社会喪失・社会復帰というサイクルを、異なる立場から相互に体験する。藤田氏はそれを「対抗しながら相互に救出しあう統合」という人間社会の課題に差し向けながら、それが子どもの遊びを通して、軽やかに体験されていることを指摘している。人が人間社会で生きていくうえで担うべき精神的な課題、実現には困難を伴う複雑な課題が、かくれんぼにおいては「経験の小さな模型」のように、軽々と楽しく体験されているのだ。あくまでも遊びとして……。だからといって、かくれんぼの遊びを残さなくてはいけない、と声高に主張したいわけではない。残すとか教えるとかといった大人の教育的価値観を超えて、子どもたちがおのずと繰り返し遊び続けてきた遊びの中に、人間社会の根幹を支える精神の深みが在ることにまずは目を開くべきなのだろう。

◆遊びの暗がりが意味するところ

かくれんぼの省察と同様のことは、子どもの遊ぶ身体を介して延々と伝わってきた伝承遊びの、どれにも当てはまることに違いない。本田和子氏は「花一匁（はないちもんめ）」の遊びを追想して「この遊びは、『選ばれる』ということの晴れがましさと恐ろしさを、何よりもよく体験させてくれた[2]」という。そして、その体験の奥には、実際にあったであろう「子の売買」（子買い）や、市が立つときに合わせて行われる「男女の交渉」（歌垣）が潜んでいると透視している。「鬼がいるから行かれな

い」という歌詞の「鬼」は人買いかもしれず、「お釜底抜け」「お布団ぼろぼろ」と歌われる貧しさは、子を売るしかない状況を暗示しているかもしれない。その後に続く「あの子がほしい」「この子がほしい」というやりとりは人身売買か男女の関係か、いずれにしても、決して能天気ではいられない、緊張を強いる状況である。にもかかわらず、子どもたちは手をつなぎ合い、相手に向かって足を思い切りけり上げて、高らかに交渉を繰り返す。あえて歴史の暗がりから引き出してきた歌詞を用いて、子どもたちは「選び選ばれる」人の関係を、緊張感を乗り超える形で遊んできたのである。大人たちの意図を超えたところで形づくられ、遊ぶ身体を介して延々と命脈を保ってきたこの遊びにも、やはり「体験の小さな模型」を見ることができるだろう。

しかし今、「花一匁」は一部の小学校で禁止され始めているらしい。なぜなら、「あの子だけは選ばない」という仲間外れのいじめがあるからだという。確かにたびたび「ほしい」と名指されて、声援を受けながらジャンケンの責を果たす人気者に比して、一度も名前が呼ばれないとなれば、無視されているようなつらさを味わうかもしれない。それが、故意になされ続けるのであればいじめとも受け取れるだろう。しかし、だからといって、延々と遊ばれ続けてきた伝承遊びが内包する深い体験の知恵を、手放してよいものだろうか。

先に触れたように「鬼」という言葉そのものが人間社会からの隔離を暗示するかのように、ほかの子どもとは異なる役割を一人引き受けることを意味する。もし、この役割を誰も引き受けなかったら「鬼」が登場する遊び自体、成り立たないだろう。また、「鬼」という言葉を無害なものに言い換えてしまったら、疎外感や孤独感と同時に、

遊びの緊張感も減ってしまう。何よりも、「鬼」が住まうこの世ならぬ異界との境界に開かれた遊びの空間の、深いけれどカランと乾いた闇は、あっさりとかき消えてしまうだろう。そうなったとき、人間の意図を超えて伝わってきた、遊びの中に深く刻まれた知恵は失われてしまうに違いない。

教育的価値観による積極的な指導や大人の介入がないまま、それでもなお、子どもたちの身体を通して、特有のリズムと謎めいた言葉を用いて、これらの遊びが遊ばれ続けてきたことの意味は大きい。そしてそれが、就学前の幼児期を中心に、学校の教育からは離れた場で遊ばれてきたことを考えるなら、これらの遊びが内包する体験の知恵は、教育という場よりも課外、あるいは保育という場にこそなじむものなのではないかと思う。同じ年齢の子だけに限るわけではない、同じ能力の子だけが集まるわけでもない、大人の指導が加わることもなく、能力や体力を問うことも、決定的な勝敗も求めない。その一方で、孤独や阻害と救い、悔しさや厳しさと笑い、特有の緊張感を維持しながら、それらが軽々と「遊ばれる」とき、合目的的な意図を超えた、体験的な知が育まれているに違いない。そしてそれは、伝承遊びが抱えるリズムやコトバややりとりの中に潜む暗がりを、子どもたちの身体感覚こそが伝えてきた成果なのではないだろうか。その感覚の前に私たちはもっと謙虚であるべきかもしれない。

（白百合女子大学　文学部　児童文化学科）

引用文献

1　藤田省三／著　『精神史的考察』平凡社選書
一九八二年、内「或る喪失の経験―隠れん坊の精神史」
2　本田和子／著『子どもの領野から』人文書院
一九八三年、内「花一匁―子買いと歌垣」